

# 元気そらち！産炭地域活性化戦略の概要

北海道空知支庁 2009年3月

## 戦略の必要性

## なぜ？ いま？

- 空知産炭地域は、炭鉱閉山という激変の波に翻弄され、人口が50万人から10万人にまで減少しました。これまで、地域の存立に向けて懸命に努力してきましたが、暮らしや経済は極めて厳しい状況にあります。
- 地域活性化のためには、各自自治体単位での頑張りがが必要です。しかし、空知産炭地域全体を覆う下向きの潮目を変えない限り、個々の成果は限られます。そこで、地域全体での取り組みが必要です。骨太の戦略や道筋を立て、意識を集中して取り組むことによって、未来の光明が見えてきます。
- 世の中が大きく変化している今こそ、大きな流れをしっかりと捉えて、自らの足場を固め、勇気を持って地域活性化に向けて踏み出すときです。この戦略は、そのための道筋を照らす役割を果たします。

※2005年、8市町の首長が集まり夕張市で開催された「炭鉱遺産サミット」では、「選択と集中」「ネットワーク」「ともに事にあたる」という基本的な合意がなされ、その取り組みの方針の具体化が待たれていました。

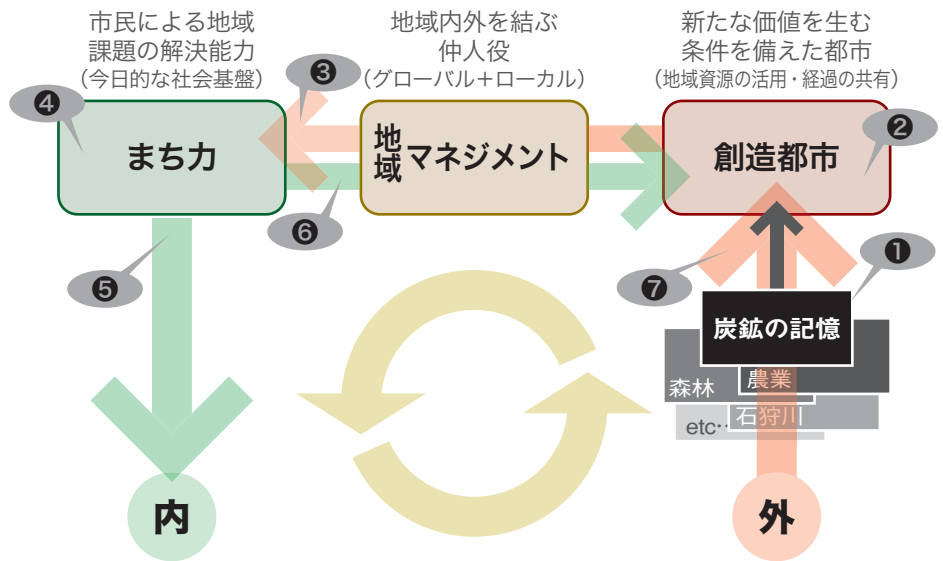


## 基本的な考え方

## 三点セットで地域内外を結ぶ

- 大切な思想** 表面的な流行を追いかけるのではなく、過去をしっかりと振り返ることが大切です。これまで日本を支えてきた空知産炭地域の歴史から、未来への手がかりを得ることが出来るはずです。
- めざす構図** 地域に残された炭鉱の記憶を手がかりに、地域外からの刺激によって、地域内の活力が生まれる循環づくりを目指します。
- 三点セット** そのためには、「まち力」「創造都市」「地域マネジメント」という、3つの要素が必要です。

- ①空知の固有性によって地域外の人を引きつけます（まずは炭鉱の記憶が一番手）。
- ②拠点となる「場」を、「選択と集中」の考え方で設定して「ネットワーク」化します。
- ③地域外の眼差しを、地域内へ伝えます（特に拠点がその役割を果たします）。
- ④地域外の眼差しに触れて、地域内の人には自らの生活を客観化できるようになります。
- ⑤誇りを回復し、住んで良かったと実感できる地域になります。
- ⑥生き方や歴史など、見えない地域資産が価値を生み、さらに地域外から注目されて、②が充実します。
- ⑦さらに地域外の人をひきつけます。



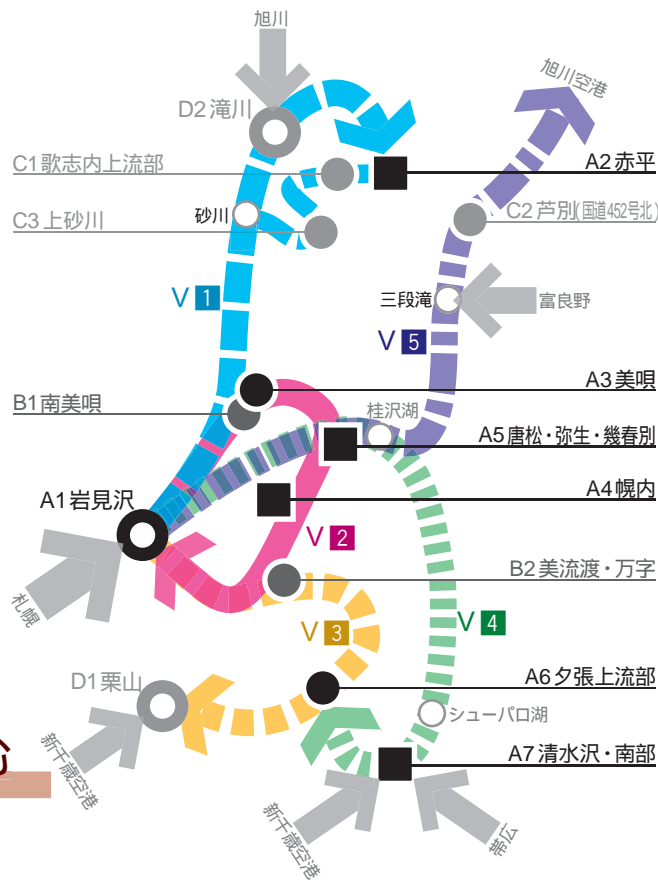
※この戦略では、炭鉱の記憶のうち物的なものを炭鉱遺産と呼んでいます。戦略が目指すのは、炭鉱遺産を残すことではなく、それを手段として活用し、地域活性化を図ることです。その取り組みの成果として、炭鉱遺産が残るのです。

## 選択と集中 限りある力を結集

数多い制約条件の中で、活性化に向けて最大限の効果を発揮するためには、選択と集中が不可欠です。

そのために、先導的な 14 の拠点を選びました。その選定基準は、ランドマーク（独自性の象徴）炭鉱遺産の価値（現況と集積状況）展開の可能性（立地位置、活動の実績や先導性）の3点です。

これら 14 拠点は、一様な重みの横並びではなく、どこをクローズアップすると空知産炭地域全体で炭鉱の記憶として表現できるかについて、また優先度や実現可能性という観点から空間的な連続性を検討し、展開の整序化を図ります。



- V 1 歴史
- V 2 アート
- V 3 産業的自然
- V 4 ジオパーク
- V 5 回廊

## ネットワーク 外の力を呼び込む

先導的拠点をネットワーク化することにより、地域外の人の関心を引きつけます。

来訪者は、観光目的の色彩が強い層（V）と、知的好奇心や動機がある層（Q）の、2つの側面から捉えることができます。

従来は市民活動では、もっぱらQを対象としていました。今後は、Vにも目配りする必要があります。

そこで、Q×Vの最大化を目指して、テーマ性を持った5つのルートを設定します。

## 拠点 外 内へ実践的な変換点

先導的拠点は、ネットワークの構成要素の一つとしてだけでなく、それ自体が明確なメッセージを発信します。拠点は、地域外から地域内へ力を引き入れる転換点であるとともに、「まち力」を育成し具体化の方向性を示す実践の「場」でもあります。

この戦略では、ケーススタディー地区の赤平市や三笠市を先導的モデルとして、地域づくりに取り組むことを提案するとともに、具体化の突破口として、景観づくり、イベント、フットパスの3点を提案します。

- 空知産炭地域共有の地域アイデンティティを物語へ
- ・炭鉱遺産など地形と歴史に深く刻まれた景観
  - 地域連携による広域景観づくり
  - ・モデル地域から他の地域へとネットワーク化
  - 空知産炭地域の統一イメージの発信
  - ・統一したサインなど
  - 「産学官民」の連携した取組
  - ・地域外の応援や新たな視点が必要
  - 地域連携のきっかけと活動の場づくり
  - ・小地域のエリアプラットフォームづくり

## 目標年次 2018年度 実現に向けて

**2段階作戦** 前半5年（～2013年度）：一部が具体化、地域内外から注目を集め始める  
後半5年（～2018年度）：活性化に向けた流れが加速し、目標達成に向けた効果が顕著に現れる。

**めざす姿** 地域内外の人が炭鉱の記憶を通じた交流を通じて、空知産炭地域全体のパイ（量と質）が拡大し、将来への選択肢が増え、その結果として持続可能な地域となることを目指します。

- 例えば... 元炭鉱マン 自らの労働や人生のドラマを訪れた人に語っている  
住民 炭鉱からまちがスタートした地域の歴史的な文脈を理解し、誇りを持っている  
道民 本道発展のルーツとして、一生に一度は必ず空知産炭地域を訪れている  
芸術家 アーティストが移住・滞在し、場の記憶を生かしたトリエンナーレを開催